
仮面ライダーディケイド～涼宮ハルヒの世界～

RYO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーデイケイド～涼宮ハルヒの世界～

【NNコード】

N0070M

【作者名】

RYO

【あらすじ】

新たな世界に着いた士たち

しかしそこは怪人もライダーもいない世界で…

「プロローグ 涼宮ハルヒの世界」（前書き）

初投稿です。

色々とダメな点もあるとは思いますが読んでやってください。

（プロローグ 涼宮ハルヒの世界）

「ここが新たな世界か。」

オレは呟く。つい先ほどとある世界の旅を終えたのでそろそろ来るのはおもっていた。

だがこれは何だ？

降りて来た新しいスクリーンに描かれていたのは、

「何で読むんですかねえ。ZON団？」

オレが思つていた事を夏みかんが先に口にする

「なんだか悪の組織みたいな名前だな。大ショックカーの支部か何かかな。士、何か知ってるか？」

ユウスケは俺に振つてくる。知るわけないだろ。

「さあな。それをこれから調べるんだろ？」

ひとまずそう言つてやる。すると俺の言葉に納得したのか、

「そうか。今度はどんなライダーが居るのかな。」

などと言い始める。楽しそうでいいな。俺にもその頭を分けてくれ。

「この世界にはライダーは居ないよ。」

不意に背後から声。聞き覚えのある、あまり好きな奴ぢゃない声がした。

振りかえるとやつぱりというか、そこには、

「やっぱりお前か、海東。一体いつの間に俺の背後に現れやがったんだ？」といふか何故お前がこの世界に居る。」

「当然だよ。僕はお宝があるところになら何処にでも行くからね。」

「質問の答えになつてない。」

と、ここで夏みかんが口を挟む。

「ちょっとといいでですか？ライダーが居ない世界つて言いましたけど、海東さんは何か知つてるんですけど？」

ユウスケも入つてくる。

「教えてくれよ、ここは何の世界なんだ？」

海東は一気にまくしたてられ少々困惑氣味に、「落ち着きたまえ。ここは、そうだな、ライダーも怪人も居ない、でも宇宙人や未来人、超能力者が居る世界、と言えば分りやすいかな。」

「分かるか！一体何の世界なんだ。」

海東は少しの間をあいてから、

「ここは、涼宮ハルヒの世界だ。」

そう言つた。涼宮ハルヒ？なんだそりや。誰かの名前か？

俺と同じこともユウスケも思つたのか、同じことを海東に聞く。「ああ、そうだ。この世界の最重要人物、それが涼宮ハルヒだ。」

「最重要つて、一体どんな意味で最重要なんだ？」

「さあ、そんなことよりも早くお宝を探さないと。」

士、悪いがその話はもうお開きにしよう。」

そう言つと海東は背を向けさつさと立ち去つてしまつ。

「一体どういうことなんでしょう。士君、とにかく私たちも外に出でみましょ。」

そう言つと夏みかんも出て行つてしまつ。ユウスケも付き従つ。

「はあ、やれやれだな。」

そう呟き俺も写真館を後にする。

まあうだうだ考えるよりは外に出てみて実際に確かめた方がいいしな。

そう思い夏みかん達を追つ。

「プロローグ 涼宮ハルヒの世界」（後書き）

どうだったでしょうか。

色々と無茶な内容でスミマセン。

僕一人ではアイデアに限界があつたんです。

読んでくださった方は良かつた点と悪かつた点を優しくコメントしてくださるうれしいです。

～1幕 異変～

突拍子もない 意味：調子はずれなこと。途方もないこと。突飛。
辞書にはそう書いてあるだろ？が俺ならもつと簡単に説明できるね。
涼宮ハルヒのこと。

これほどピッタリこの言葉の意味と合つ人間もなかなかいないだろう。

とにかく涼宮ハルヒとはそういうとんでもない人物なのである。

10月某日。

つい最近まで誰かが太陽を地球側に投げたのかと思うようなクソ暑い、

というかもはや熱いのレベルまで達していたsummer day

sはどこかへ去り、夜は掛け布団が必要品となつてきてまだ日も浅いある月曜日のことである。

本日も涼宮ハルヒはその 突拍子もない スキルを遺憾なく發揮し、俺にこんなことを言つてきた。

「ねえ、キヨン。あんた仮面ライダーって知つてる？」

「知つてるも何も、男ならガキの頃に一度は見たことがあるだろ？つていきなりなんだ？何故今仮面ライダーの話をする。今は授業中だぞ？」

「そんなことはどうだつていいのよ。とにかく知つてるのね。
あたし、昨日またまたテレビつけたらやつてたから何となく見てた
んだけど、

本当にかつこいいわね、アレ、現実の世界にも居ないかしら。

ううん、居るわ、絶対。私達が知らないだけよ。私達の知らないところ

で今日も世界の平和を守つてゐるのね。」
いきなり何を言い出すんだこいつは。頭でも打つたのか？いや、ライダー・キックを食らつたのか？等と考えているとシャーペンで思い

つきり背中を刺された。

「痛つ！何故刺す。

「あんた今あたしに対してもう少し」と考へてたでしょ。」

「か、考えてねえよ。」

何故こいつは俺の心が読めるんだ？

放課後

もちろん今日のSOS団の集まりではそのことが話題となつた。ハルヒが得意げに仮面ライダーについて語るその姿に朝比奈さんは「ふええ」とか「そうなんですか」と相槌を打ちながら聞いている。長門はいつも無表情でじつとハルヒを見ている。古泉もいつもの調子でハルヒの話を黙つて聞いている。古泉もいつのまにかお前らなんとも思わねえのかよ。

ハルヒは一通り仮面ライダーについて必殺技がすごいとか、何故敵は変身前に襲いかからないかとか、

たのが、

に8時に集合ね。

とまた戸曜日たどりのには時間と場所あてをつけて指定しておきか
つた。

怪人なんて居てたまるか。居ても出でくるなよ。ここには確実に怪人以上に強い奴も居るんだ。長門とか長門とか長門とか。出て来たつて返り打ちだぜ。

「じゃあ、今日は」これでおしまい。

「そう言うとハルヒはさつさと部室を後にする。やれやれ、いつも楽しそうでいいな、お前は。

「困りましたねえ。」

不意に古泉が本当に困っているのかと問いたくなるような顔で話を切り出す。

「やつですね。今日の涼宮さん、本当に楽しそうでした。」

朝比奈さんも古泉に続いて切り出す。しかし本的に困った顔をしている。

困った顔もかわいいですよ、朝比奈さん。

「あなたはどう思いますか？」

不意に話を振られてアホな方向へ行っていた思考をもとに戻して答える。

「どうして言われてもな。俺には一体何が困っているのかもわからん。」

正直に答えると古泉はそもそも意外そうな顔をし、

「そうですか。ではこう言えれば分りますか？涼宮さんは日本本当に楽しそうに仮面ライダーについて語っていた。怪人がこの世界にも現れればいいのに」と。

「ちょっと待て、じゃあなにか？明日からここは怪人が世界征服を狙つて無意味な破壊を繰り広げる世界に変わっちゃつてことか？」

「その可能性は、ゼロではありませんよ。

なにしろ涼宮さんには、」

「願望を実現する能力がある、か。」

「そういうことです。」

「だがな、あいつは突拍子もないことを言い出す割にはちやんとした常識も兼ね備えているんじゃなかつたのか？」

それならいくらなんでもそこまでは、「

「やうともいえません。今日の涼宮さん、とても楽ししそうでしたから…。」

朝比奈さんまで言ひ出す。いや、無いだる。ですがにそこまでは。でも思い当たることは多々あるしな。

「とにかく、明日になればわかる」とです。今日はひとつあんまり解散ということ。

「おこ古泉、お前らしくもない、仮にもし明日お前や朝比奈さんの言つよつに怪人が現れる世界になつたとして、

その場合の対抗策を考えるのがお前じゃないのか？」

「そう言われましても、今回は本当にどうなるかわかりませんし、仮にもし現れた場合は、仮面ライダーの方も同時に現れるでしょう。

」

そう言つて古泉、続いて長門も教室を後にする。

仮面ライダーねえ、今やつてるのはなんだ？Wだけ。

朝比奈さんも今日は教室に入るや否やハルヒのトークを聞かされ続けていたのでメイド服に着替えておらず、すぐに後に続く。俺も部室を後にすると帰路についた。

その帰り道俺は色々と思考する。

今回はマジでないよな、ありえなさすぎる、仮面ライダーなんて。何を思つてそんなもの見ようと思つたんだ、ハルヒの奴。まあ確かに遊びの内容が小学校低学年の男子生徒のようなやつだ。特撮が好きだつたとしてもおかしくはないが。

とは言つても既にそれ以上にありえない事態を色々と体験済みの俺にとつては今更怪人が現れようが別になんとも…、

スマン、前言撤回。

目の前にそいつが、居た。

地獄から湧いて来たような毒々しい外見。背中からは無数の棘が出ていて、トゲトゲのしつぽまである。

体色は紫の、例えるなら、えーと、そうだな、トカゲ男、リザードマンとかいいんじやないか？

うん、これだ、一番しつくりくる。

なんて考へてる場合じやねえ。

早く逃げないと。だが足が一步も動かん。

目の前のトカゲ男、リザードマンは一步一歩距離を詰めてくる。えらくゆっくりだな、足がすくんで俺が逃げられないとも思つてゐるのだろうか。実際そうなわけだが。

そいつは長い爪のある腕を振り上げ、俺めがけて振りおろす。

さすがにヤバいな。あれに斬られたらどうなるんだ。ナイフで刺されるのとどっちが痛いんだろうな。

俺は思わず目を瞑る。しかしその爪が俺に届くことはなかった。

なかなか斬られる感触が無いので目を開けてみると俺の眼前には北高の制服姿の人影。

背は俺よりも小さい、というかスカート姿なので女子だ。

そこまでしてようやく田の前でリザードマンの爪を受け止めている人物が誰であるのか理解した。

「な、がと…？」

そう、我らが救世主、そして怪人にも引けを取らないであろう戦闘力を備えた長門有希様のご登場である。

やつちまつてくだせえ、長門様。

おもむろに長門が怪人めがけ手をかざす。口からは呪文のような物が聞こえる。

いつぞやの俺襲撃事件の時のように田の前の怪人のプログラムを書き換えて消し去るのかと思ひきや、

「ツ…」

恐らく二度と見れないであろう長門の驚愕顔。

驚いていると言つても恐らく俺で無ければわからないような微々たるものだが。

とにかく、あの長門がそんな表情をしたのである。

すかさずリザードマンの掴まれていない方の手による斬りあげ攻撃。

長門は飛びのいてこれをかわす。俺のすぐ横まで飛んできた。

「逃げて。」

不意に長門がこんなことを言い出す。長門らしくもない、お前なら俺を守りながらでも十分戦えるだらう。て、頼り過ぎだな、俺。

しかし次の長門の発言は俺の予想を大きく裏切るものだった。

「私では、あれを倒せない。」

「な、なんでだ？前に朝倉にやったみたいにやれば…。」

「もう試した。」

まさか長門の技が効かないとは。どうする、これは絶体絶命という奴じゃ…。

長門でも倒せないって、怪人無茶苦茶強えじやねえか。

「やれやれ、海東の奴、嘘つきやがつて。屈るじやねえか。」

背後からそんな声が聞こえる。俺は驚いて振り返る。

そこには全く見覚えの無い男が立っていた。

そいつは俺達の方を見るとフツと笑いこう切り出す。

「お前ら、下がってる。こいつは俺が倒す。」

そう言うと右手には何やら得体のしれない白いモノ。

男はそれを腹部へと持つて行く、すると左右からベルトのような物が伸び白いものを固定する。

左腰にはさっきまで無かつた本のようなものまで出現していた。それを開くと中から一枚のカードを取り出す。

「変身！」

掛け声と共にカードを白いものの中へと挿入。おいおい、まさか、

「カメン、ライド…」

独特的の電子音。両手で白いものを挟み込む。

「ディケイド！」

さらに音声が鳴り、その男は姿を変えた。

マゼンタ色の体色をした、こいつも怪人でいいのか？だとしたら何怪人だ？マゼンタ色だからマゼンタ怪人とかか？うーむ、しつくりこない。

次の瞬間そいつがおもむろに走り出す。

トカゲ怪人も応戦態勢に入り身構える。

マゼンタ男が間合いに入ったとたんトカゲ男は鋭い爪で先制攻撃。

マゼンタ男はそれをかわしカウンターのパンチ、キックをたたきこむ。

後ろ回し蹴りで相手を後退させるとマゼンタ男は左腰から新たな力

ードを取りだす。

それを先程と同じ動作で挿入。

「アタック、ライド…スラッシュ！」

電子音の後、男は左腰の本を右手に持つ。あとで知ったんだがそれはライドブッカーという名前らしい。

するとさっきまで本だったものが変形して剣状になる。

剣状になつた刀身の部分がマゼンタ色に光る。その状態でトカゲ男に剣撃をたたきこむ。

右上からの袈裟切り、返す刃で左から横に払い斬り、振りかぶつての斬りおろし。

その3撃でトカゲ怪人はたまらず吹っ飛ぶ。

ゴロゴロと転がり何とか制止、立ちあがるのもがく。

マゼンタ男は追撃しようと距離を詰める。

ふと、トカゲ男が笑つたような気がした。

その瞬間背中の棘をマゼンタ男目がけ打ち出す、マゼンタ男は数発受けてよろめくがすぐに横つ跳びに飛びでこれを回避、新たなカードを挿入する。

「アタック、ライド…ブラスト！」

こんどはさっきまで剣だったものが銃状に変形。

銃口を怪人に向け引き金を引く。

銃が分裂したように見え、無数の弾丸が敵をうちぬく。全ての弾丸をまともに受け、無様に転ぶ。

「そろそろ、トドメといぐか。」

マゼンタ男は新たなカードを取り出すとそう言いながら挿入。

「ファイナル、アタック、ライド…ディディディディケイド。」

音声の後、マゼンタ男の前に無数のカード状の物が出現。

マゼンタ男が跳躍するとカードも後を追うように上昇。マゼンタ男はそのカードの中へと身を投げ出す。

すると信じられない速さであつという間に怪人のもとまで移動し、その勢いのままキック。

俗に言うライダー・キックという奴か。しかし「ライダー、キイイイイイック！」とは言わないんだな。

ライダー・キックをまともに食らった怪人は吹き飛び爆発。その場から消滅した。

変身解除した男はこちちらへと歩いてくる。とつそに俺は思ったことを口にする。

「あんた、もしかして仮面、ライダーか？」

恐る恐る尋ねる。すると男は意外、といった表情の後言った。

「なんだ、知ってるのか？？」といつことばこの世界にもライダーが居るのか？」

「いや、そうじゃないんだ。」

「どういうことだ。」

俺はそれから涼宮ハルヒのこと、仮面ライダーはテレビの中だけの話ということ、

恐らくハルヒのせいでこうなったことまでを洗いざらい話した。

初対面でこれだけ話してしまうのは妙と思うかもしれないが、とにかくこの時はそうしなければいけないような気がしたんだ。

長門はさつきから心なしかしょんぼりしていくいつも少ない口数が更に少ない。

同意を得ようと長門に話を振った時、いつもなら「わへ、」と言つてうなずくのに今回は声も出さなかつた。

ちなみに俺からも男に色々と質問してやつた。

そしてわかつたことが、この男は門矢士、仮面ライダー・ディケイドというのに変身できて、わけあって色々な世界を旅しているということだ。

この世界で自分のやらなければならない」とを探してこるらしい。正直態度がでかいので結構ムカついた。

「なるほどな。大体わかった。」

土はそう言つと一拍おいて続けた。

「つまりその涼宮ハルヒってのに怪人の存在を知られないようにす

るのが俺の当面の目的ってことか。」「ああ、そうだ、頼む。」

「で、いつまでそうするんだ?」

「何とかして俺がハルヒに怪人なんていない方がいい、居ないに決まっていると思わせるよう説得してみる。」「ほお、どうやるんだ?」「そこまではまだ考えてない。」「キッパリ言うな。」「仕方ないだろ、俺だっていきなりのことで状況を飲み込むのがやつとなんだ。」「

とにかく正直言つて状況すらあまり飲み込めてない。いや、飲み込みたくない、と言つた方が正しいのか。俺が飲み込みたいと思うのは朝比奈さんが入れてくれるお茶と母親の手料理だけだ。

「じゃあとにかく俺は、お前が説得するまで怪人の存在を隠しながら涼宮ハルヒを護衛すればいいわけだな。」「ああ、多分ハルヒは自分が怪人に襲われるのも望んでいるだろうからな。」「なるほど、いいぜ。わかった。」「

わかってくれたか。さつきまでの偉そうな態度とは裏腹に物わかりはいいみたいだ。

どこかの団長様とはえらい違いだな。あいつにもこれくらい俺の意見を聞く素直さが欲しいもんだ。

会話が終わると土はクルリと背を向け、どこかへ行ってしまった。さてと、俺達も帰るかな。

と、その前に、
「おい、長門、どうしたんだ?心なしか落ち込んでいるような気がするんだが。」「少々の間があつて長門は答える。今日はいつもよりその間が長い気がしたんだが、気のせいだよな。

「あなたを守れなかつたことを悔やんではいる。」

なるほど、それで元気がないわけか。

「気にするな、それに守れなかつたつてことは無いだろ。

お前が来てくれなけりや、俺は今頃あいつの爪の垢になつてゐるところだぞ。

だからそう氣を落とすな。」

本当にそうだ。ひょっとしたらその後にあのトカゲ男の餌になつてたかもしれないな。

あんな奴のこれから生命活動に必要な栄養分となるのはご免だな。といつてもあいつが肉食なのか草食なのか雑食か、はたまた食事なんて必要ないのかは

怪人専門の博士でも、ゲテモノマニアでもない俺には知つたことではないが。

長門は何も言わない。ただうなずきそのまま行つてしまつた。

本人なりに納得したのだろうか。

さてと、俺も帰るか。

「いやー悪いね、遅くまで付き合わせちゃつて。」

「いえ、いいんです。私もちょうど見たいものがありましたから。」

場所は変わつて夕暮れ時の商店街。

夕日に映える美女二人。朝比奈さんと鶴屋さんだ。

二人が何やら買い物をして一緒に帰つてゐる最中のようだ。

いやー、ほんと、絵になるねえ。

そこらの博物館に飾つてあるお世辞にも美人とは言えそうもないような美人画より圧倒的に。いやマジで。

ちなみにその場に居ない俺が何故一人のことを語つてゐるかというと、

ん、なんだつて？妄想？夢オチ？違う、事実だ事実。

とにかく何故俺が語つてゐるのかに関しては突つ込んだら負け、と

いやつだ。

あとでちやんと教えてやるからそれまで待つてね。

おつといカン、話を戻して一人の下校中。

商店街を抜けてもなお、楽しそうに話す一人のもとへ一人の男が現れた。

その男は朝比奈さんを見咎めると唐突にこう切り出した。

「やあ、君が未来人なんだね。」

いきなり何を言い出すんだこいつは。

朝比奈さんと鶴屋さんはわけがわからずポカンとしている。

つて朝比奈さん、あなたまでポカンとしてちやいけませんよ。

あなたのことですよ。あなたの事言われているんですけどから。

俺の念が通じたのか、朝比奈さんはアワアワと慌て出す。

「ち、ち、ち、違います。私は未来人なんかじゃありません。」

激しく動搖してそんなことを言つもんだから俺も気が気がしない。

そこまでアワアワしてたら逆にそうですと言つてるようなものですよ、朝比奈さん。

俺がこの場に居なかつたのは何とも遺憾である。居れば適切なフォローブラックを入れられたものを。

しかし男はアワアワする朝比奈さんを睨みつけと言つた。おそらくこの光景を見た世の男子の98%はこの男を敵と認識するだろう。もちろん俺も98%の内の一人だ。残りの2%は何かつて?そりや勿論女性に興味の無い、所謂ゲイつてやつだ。

「とぼけないでくれたまえ。君の正体はちやんと

そこで男の話を遮るようにして鶴屋さんが口を出す。本当にいいひとだよな。アニキと呼ばせてもらいたい。

「なんなのさ、あんた。何が言いたいのかさっぱりだけど、みくるに何かしようつてんなら

今度は男が話を遮る。お前、無礼だぞ。アニキのありがたいお言葉だというのに。

「そんなことはどうでもいい。とにかく僕はこの世界に興味がある

んだ。教えてもらえるかな、未来人さん。」

堂々と未来人いうな。こりゃもう鶴屋さんにばしゃれたな。
朝比奈さんはそこで意を決したようだ。そういう顔も可愛いな、
ハツ、いかんいかん、話を続けねば。

「わかりました、ではあそこのベンチでお話しましょ。」

ベンチを指さし言つ。鶴屋さんは、朝比奈さんの反応を見て危険は
無いと悟ったのか、

「なんか大事な話みたいだし、あたしはこの辺で待ってるから、終
わつたら教えてね。」

空氣の読みも完璧である。

「ありがとうございます、では行きましょうか。」

男と一人ベンチに行き話しを始める。もっとありがたがれよ。朝比
奈さんと一人つきりでベンチで会話なんて、
世の男どもの夢だぞ。もちろんマイドリームでもある。まあ、俺は
お前らと違つて何度か経験済みだがな。

「一体あなたは何者なんですか？」

座つたとたんに朝比奈さんが切り出す。男は何が愉快なのか、とにかく愉快そうに話し始める。

「僕は海東大樹。世界を旅してお宝を探す、いわゆるトレジャーハンターフてやつだ。」

「トレジャー・ハンター？ 世界を旅つて…。」

「あ、世界を旅すると言つても国を行き来するところの意味じゃない
よ。」

「こひで言つ世界とはもつと大きな意味、とこひじとせ。」

「もつと大きな？」

「そう。パラレルワールドってわかるかな。」

「えと、私達の住む世界の他にも同じような世界があつて、私達と
同じような人たちが暮らしているつていつ…。」

「うーん、ちょっと違うけどまあそんな感じかな。」

説明はこれくらいにして本題に入ろう。」

朝比奈さんが瞳をパチクリさせる。説明わからん。こいつも宇宙人
未来人超能力者の類か?でなけりや電波だな。

一本題？」

「そう。僕は世界を旅してお宝を探していると言つただろう？　率直にお云ひ。この世界のお宝は何か教えて欲し、」んだ。

率直に言おう。この世界のお話は何か教えて欲しいんだ。

「人の世界の、お宝、ですか……えと、さ、金塊とか、ですか？」

「そうじゃない。僕が探しにくるのはやがてこうした物ではなく、この世界でしか手に入らない物と二つほどだ。」

「」の世界でしか手に入らないもの、ですか、うーん、なんでしょう。

三

「もういい、時間をとらせてすまなかつたね。帰つていいよ。上

۲۰

朝比奈さん、あなたが謝る必要なんてどこにもありませんよ。むしろお前、海東大樹とかいったか、お前が朝比奈さんに謝れ。

地獄の底から響いてくるよ／＼な喰い声

二人は声のした方を振り向く

そこには鶴屋さんかトガケのよこな そ二 働道を襲つた怪人と似た化け物と戦つていた。

戦うと言つても必死にトカゲ怪人の攻撃をかわしているだけだ。よ
くかつせるな、俺は却がすくんで動けなかつたのさ。

きれいな手が、もつたいたい。

海東の声に被せるように朝比奈さんの悲鳴。

「みくるー来ちゃダメ。逃げて。」

鶴屋さんはそう言いながら怪人と朝比奈さんの間に割り込むように立ち位置を変える。こんな時でも朝比奈さんを守るつとどするとは、あなたは騎士か何かですか。

しかし、更にその前にあの海東が割り込む。鶴屋さんは驚き声を上げる。

「アンタ、危ないよ。みくるを連れて逃げて。」

しかし海東は鶴屋さんの必死の声にも怪人にも大して動搖した様子もない。

「安心したまえ。こういうのは僕の専門でね。」

そう言うとどこから取り出したのか右手には銃状のもの。そこへディケイドと同じようなカードをこれまで何処からともなく取り出し銃へと挿入。

「カメン、ライド。」

独特の音声と効果音。海東は銃口を上に向け引き金を引く。

「ディッエンド！」

音声と同時に銃口から打ち出された青いカードのような物が射出された。

そしてそれらが海東のすでに変身し終えた頭部に突き刺さる。

その瞬間、それまで灰色だったディエンドの体の部分に青みがさす。変身が完了したようだ。

「な、何者だい、あんた。」

鶴屋さんは驚き声が震える。

「通りすがりの仮面ライダーってところかな。ま、なんでもいいけど。」

それだけ言ってトカゲ男めがけ駆けだす。

それを見たトカゲ男は咆哮。

それを聞きつけたのか背後の雑木林からさらには3匹のトカゲ男が現れる。

「これくらいじやないと張り合いかね。」

海東はそう言い新たなカードを取り出し挿入。

「カメン、ライド、ライオ　トルーパー！」

音声の後何もない方向へ向け引き金を引く。

すると何処から現れたのか三体のライダーに似た姿の者たちが現れる。

「僕の優秀な兵隊たちだ。君達とどっちが強いかな。」

海東はセリフの後で引き金を引く。

海東の銃撃が合図だつたかのように3体のライオトルーパーが突撃。それぞれが1体ずつのトカゲ男を相手にする。

必然的に余つた一体がディエンドの相手となる。

しかし大口をたたくだけはあつてその実力はディケイドに引けを取らない。

あつという間にトカゲ男を押し切り最後の回し蹴りで吹き飛ばす。ちょうどそこへライオトルーパー達が吹き飛ばしたのか残りのトカゲ男達も転がつてくる。

「そろそろ、トドメと行こうかな。」

新たなカードを挿入。

「ファインアル、アタック、ライド　　ディディディディエンド！」

音声と共に前方に無数のカードが筒を描くように現れる。

照準を合わせ一気に引き金を引く。

銃口から極太のレーザーが発射されライオトルーパー達も巻き込んで4匹のトカゲ男達へと炸裂する。

4体のトカゲ男は一瞬で爆散。

変身を解いた海東の下に朝比奈さんが行き、

「今のは一体‥。」

海東に尋ねる。しかし海東は首を振ると答える。

「僕にもわからない、この世界には怪人はいないはずなんだけどな。でも待てよ、士達がこの世界に来るときに一緒に紛れて来たのかも。」

後半は海東が一人でブツブツ言っていた。朝比奈さんはここで何か思い立つたかのように咳く。

「もしかして、涼宮さんが原因かも。」

それに対して海東が反応。鶴屋さんはいつの間にか気絶している。

朝比奈さんが何かしたのだろう。

「涼宮さん？ それって涼宮ハルヒの事かい？」

「ご存じなんですか？」

「まあね、でもどうして知っているのかは僕知らないし、一体その人がどんな人物かもわからない。何しろ会つたことが無いからね。それで、どうしてその涼宮ハルヒが関係していると？」

「今日、涼宮さんが言つたんです、仮面ライダーを見たって、それでこの世界にも怪人が現れればいいのについて。」

「どうしてそれで彼女が原因だつて思うんだい？」

そこで朝比奈さんはすこしの間をおいてから、

「涼宮さんには、願望を実現する能力があるんです。」

海東はここで始めて動搖を見せる。

「なんだって！？」

それから朝比奈さんはハルヒのこと、ハルヒを取り巻く様々な組織のこと等について洗いざらい話した。

何故初対面の海東にこんなことまで教えるのかといつと、まあ、恐らく、俺と同じ理由だろう。

話を聞き終えた海東が残念そうに言う。

「なるほどね、よくわかったよ。要するにこの世界のお宝はやはり涼宮ハルヒ、ということか。

まいつたな、お宝が人物だとこうなら手に入れることはできないね。残念だ。」

海東は言い終えるとベンチから立ち上がり背を向けさせると歩きだす。

「涼宮ハルヒ、か。俺もそいつに会つてみる必要がありそうだな。
後方で何かが変化する音、続いて足音。

「またお前か、鳴滝。」

「ディケイド。貴様のせいでの世界もおかしくなつてしまつた。
本来は怪人などいらない世界のはずだったのに、お前が来たせいで、
この世界は破壊される。」

それだけ言つと鳴滝は何処へともなく消えてしまう。

「俺のせい、か。」

～1幕 異変～（後書き）

ここから色々とアイデアの限界を感じました
アドバイス等よろしくお願いします。

～2幕 謎の転校生その2～

日付は変わつて翌日。

いつも通りの通学路、いつも通り、谷口と国木田に挨拶し、げた箱へと向かひ。

いつも通り靴を履きかえようとしたところへ朝から聞きたくもない声が聞こえる。

「まことになりました。」

「古泉。俺にもまことに起こつたぞ。」

朝からお前に会うなんて、今日は多分厄日だな。」

そんな俺の皮肉は無視して古泉は話を続ける。

「とにかくまことになつたんです。」

世界が壊れるかもしません。」

「世界が壊れる？」

「はい。今までにない規模で世界が改变されました。それも一晩で。」

「どう改变されたんだ？」

薄々感づきつつも一応聞いてみる。

「怪人が現れたんですよ。」

「何イー！？なんてな。知つてるよ。俺も昨日襲われたからな。」

「へえ、そうなですか。お怪我はありませんか？」

「ねえよ。で、どうするんだ？」

あつたら来ないだろ？

「今のところ有効な策は特にありません。今できるのは涼宮さんで、怪人の存在が露見しないようにしつつ、彼女に怪人なんて居なくていい、居るはずがない、と思わせる」と

くらいですかね。」

「要するにお前も俺と同じ意見なんだな。」

「あなたも同じ考えでしたか、これは嬉しいですね。」

「気持ち悪いぞ。で、ハルヒにさつぱり仕向けるのは誰がやるんだ？」

「おや、その質問の答えは既にわかつてこると思いましたが。」

「つまりは、俺ってことか？」

「そう言つことです。涼宮さん」最も影響を及ぼせるのはあなたしかいませんから。」

「はあ…わかったよ。やるだけやつてみる。」

やれやれ、なんでいつもこう面倒なことを押しつけられるかね、俺は。

心の中で悪態をつきつつも古泉と別れ教室へ、ここからはまたいつも通りの日常が始まると思つていたんだが…。

朝のホームルーム。正直言つてかなりどうでもいい時間を俺はさつさと終わらないかと思いながら聞くともなく聞いていた、

「えー、では突然だがここで転校生を紹介する。」

教師のその言葉に生徒一同ざわつき始める。

谷口の女の子かな？ 可愛いかな？ といつ独り言は全員無視だ。

「いいぞ、入つてくれ。」

その声でドアがガラリと開く。そして入ってきたのは、谷口の望み通りの絶世の美女、ではなく。

「門矢士だ。よろしく。」

士だ。仮面ライダーディケイドとやらに変身するあの門矢士だ。一体何の目的があつて転校してきたのかは知らんが、その格好、かなり無理があるぞ。

どう見たつて高校生には見えん。

確實にコスプレだ。

そんなことを思つ俺のところへそいつはスタスタと歩いてくると、

「よつ。」

いきなり声を掛けてきやがつた。何処となく古泉を連想して気分が悪くなる。

何とかしてこいつがなんでここに居るのかを問い合わせねば。
俺はすっと士の耳元へと口を持つて行き（変な意味じゃないぞ）
さやく。

「お前、なんで。」

「決まっているだろ。護衛だ。」

「護衛つたつて、もっと他に方法があるだろ。」

「いいだろ。この方が堂々と護衛ができる。」

「ちょっと、ちょっと、キヨン、アンタこの転校生と知り合いなの？
てか何コソコソ話してるのよ、アタシも混ぜなさい。」

何故そうなる。

しかしハルヒの突然の乱入によつて俺達の会話は中断された。
こいつにバレるわけにはいかないからな。

会話が中断したのを皮切りに教師が授業を始め出す。
士も自分の席へと移動した。

そしてかれこれ6時間。

俺は教科書をさつさと片付け愛しの朝比奈さんが待つ部室へと向かう。

いつものようにドアをノック。するとこれまでいつものように「は
あ〜い。」と天使の声。

My sweet angel 朝比奈さん。

それからはいつものように朝比奈さんにお茶を汲んでもらい、長門
が現れ、少々遅れて古泉も現れ、
と日常が戻りつつあつたその時、非日常の全ての元凶がドアを勢い
よく開け放ちながら現れた。

「おつ待たせ。新入部員を連れて來たわよ。」

新入部員つてまさか…。

「門矢士だ、よろしくな。」

そのままかだつたようだ。士は自己紹介だけ済ませるとさも当然と
言わんばかりに俺の隣にいつの間にか増えていたパイプ椅子を持つ

てくるとドカッと腰かける。

俺は土にだけ聞こえるような声で、

「田立ちすぎだぞ。気付かれないように護衛はじうした。」

すると土はフンと鼻を鳴らすと偉そうに言った。

「実際気付かれてないだろ？それにそばに居た方が何かと護衛がしやすいと思ってな。

ま、俺クラスになると正体だけは明かさずに堂々とできるんだよ。それに、涼宮ハルヒってのはどんなやつか俺にも興味があつたしな。

」

ムカつく。話を聞きながら思つたのはそれだった。

古泉とはまた違つたムカつきを覚えつつ聞き返そうと口を開きかけたその時。

「ちょっと、二人だけの世界に入つてんじゃないわよ。」

ハルヒがジト～っと睨んでくる。おいやめろ、そんな目で俺を見るな。

しかし、気を取り直してオッホンと一つ咳払いすると、

「今日から正式に新たな部員として活動してもらひ、門矢士君よ。

謎の転校生その2にして、スポーツ万能、頭脳明晰、おまけに謎の転校生その2よ。」

「謎の転校生2回いっただぞ。」

「うるさい。キヨン、あんた知り合いたいだから門矢君にSOS

団のなんたるかを隅から隅までしつかり教えてあげなさい。」

「SOS団のなんたるかって、俺自身まだあまり理解できていないんだが。」

「つべこべ言わずに教えてあげなさい。いいわね。」

「へいへい…。」

さすがは理不尽大王である。

そんなこんなで新入部員の紹介だけで今日も特に何をするでもなく下校の時間を迎える。

「じゃ、今日の活動はこれでおしまい。キヨン、鍵よろしくね。」

「はいはい…」

それだけ言つてさつさとハルヒは部室を後にする。

お前は一体何しに来たんだと言ひ俺のささやかな疑問は胸の奥にしまっておくとして。

ハルヒが去つて5人になつた途端、古泉が切り出した。

「門矢…士…君…でしたか。君、一体何者です？」

「仮面ライダー…」

士が言いだすよりも早く長門が入つてくる。昨日のことはもう気にしているようだ。

いつも通りの調子が戻つてゐる。といつても他の奴にはなんのことかわからないだろうがな。

「涼宮ハルヒの願望によつて現れた、仮面ライダー。怪人も既に現れている。

私たちも昨日襲われた。」

淡々と長門が語る。古泉は納得、と言つたように手をポムッと叩き、「そうでしたか、あなたが。」

「ああ、よくわからんがそういうことらしい。」

士は腕と足を組んで語つ。やることがいちいち偉そつだな、「コイツ。」それから俺達は互いに現状の報告を行つ。しかし、全て語りきるには時間が足りず、俺達は場所を移し、いつものファミレスで話の続きをする。

そして何故か5人で下校。何故そうなつたのかは、成り行きと言つやつだらう。仕方ないさ。

「しかし困りましたね。」

古泉があまり困つてなさそうな顔で語つ。

「何が困つたんだ?」

俺はスルしようか迷つたが一応聞き返す。

「涼宮さんのことですよ。よ。

これだけの規模で改变されると、修復できないかもしませんね。

「するとどうなるんだ?」

「世界は怪人に征服される。または仮面ライダーがこれを救う。」
長門が答える。

「最悪世界が元に戻らなくても結果は後者だけだな。」

士が偉そうに言う。

「あの…。」

朝比奈さんが言いにくそうに切り出す。

「わ、私実は昨日門矢さん以外の仮面ライダーにあつてるんですけど…。」

そう言い朝比奈さんは昨日のいきさつを語り始める。さつき語つてた朝比奈さんの回想は、この話を聞いて考えた、正直言つて半分俺の妄想だ。

それを聞いた士は、

「なるほどな、大体わかつた。アイツ、一体何をたくらんでやがる。」

「なんだ? 知り合いなのか?」

「まあな。」

「どんな奴なんだ?」

俺がその疑問を口にしたその時

グオオオオオオオオオオオオオオ!!

聞き覚えのある雄たけび。その中で戦う青い影。

「噂をすればつてやつだ。」

士はそう言い一步前へ踏み出るとバックルを装着。変身の掛け声と共にカードを挿入。

「カメン、ライド

電子音が聞こえ、士がバックルを閉じる。

「ディケイド!」

変身が完了すると士は先程から戦っている青い戦士の所へと駆けていく。

「よし。」

目の前のトカゲ男を蹴り飛ばしながら士は青い戦士へと軽い挨拶。

「ちょうどよかつた。士、手を貸してくれ。」

青い戦士、海東大樹扮する仮面ライダー・ディエンドは田の前の敵を銃で殴りつけつつそう言った。

「それにしても数が多いな。一体どこから湧いてきやがった。」

「さあね、僕にもわからないよ。そもそもこの世界には怪人は居ないはずだからね。」

二人は背中合わせに言い合つとお互いに背を守りつつ戦う。

「このままじゃ埒が空かないな。」

士はそう言い新たなカードを取り出し挿入。

「こういう時には、これだ。」

「カメン、ライド

バツクルを閉じる。

「カブト！」

先ほどとは違う電子音と共に新たな変身。赤の戦士、仮面ライダーカブトだ。

両手のパンチで一体の敵をまとめてふつ飛ばし新たなカードを取り出す。

「アタック、ライド

「クロックアップ！」

次の瞬間士の姿が消える。

と同時に周辺の敵が一気に爆散していく。

「やるね、じゃあ僕も。」

今度は海東が新たなカードを取り出し銃に挿入。

「カメン、ライド

海東は銃を構え引き金を引く。

「ブレイド！」

すると海東の前に別のライダー、仮面ライダー・ブレイドが姿を現す。更にカードを挿入。

「ファインアル、フォーム、ライド」

「痛みは一瞬だ。」

そう言い海東はたつた今召喚した仮面ライダーブレイドに銃口を向けると躊躇なく引き金を引く。

「ブブブブレイド！」

撃ち抜かれた仮面ライダーブレイドはそのまま消えるのかと思いきやあらぬ形へ変形。その姿は大剣のようだ。

それを左手に持つと、向かってくる敵をなぎ払う。なぎ払われたトカゲ男たちは爆発と共にその数を減らしていく。

「トドメといくか。」

いつの間にか姿を現した士がこれまたいつの間にか新しいカードを手に持ち言い放つ。

「ファイナル、アタック、ライド」

「カカカカブト！」

それを見た海東も新しいカードを手に、

「それもそうだね。」

と言い銃へと挿入。この間誰ももつ者の居ないブレイドの大剣は海東の手の高さで浮いている。

「ファイナル、アタック、ライド

「ブブブブレイド！」

士扮するカブトは空中へと跳躍するとそこからライダーキックを残つた敵の一団めがけ放つ。

海東は手に持つ大剣を大きく振りかぶり一気に振りおろす。剣先からは衝撃波が生まれ別の敵の群れ目がけ突き進む。両者とも命中。

大爆発。

爆煙が晴れると一人が变身解除して立っていた。

場所は変わつてとある廃屋。

ここに先程までティケイド達と戦っていたのと同種のトカゲ男達が

集まっている。

その中心にはトカゲ男達とは微妙に姿の違う、例えば背中やしつぽの棘が大きかつたり、

体色が禍々しい紅色だつたり、のトカゲ男達の親玉と見える怪人が立つてている。

トカゲ男の親玉は一度辺りを見回すと大音量で怒鳴り声を上げる。

「涼宮ハルヒを探せ！ 奴の力を使えば我々がこの世界を手にできるのだ！」

怪人たちがその声に答えるように一斉に雄叫びをあげると散つて行つた。

（終幕）仮面ライダー・キヨン

次の日。

現在3時間目の数学の授業中。

前方では教師が意味のわからない数式を黒板に書き、どこの国の言葉かわからないような言葉を連呼している。

要するに俺は授業に置いて行かれたわけだ。今度のテストは赤点だなこりゃ。

こりゃハルヒにでも頼んで教えてもらうしかないな。
あいつが一番率先して遊びまくっているにもかかわらず成績がいい
つて一体どんなからくりだ。

天の人に対するパラメータ配分は随分と適當だな。俺にもあと5グラムでいいから分けてくれ。

などと考えていると不意に教師が、

「よし、門矢、この問題解いてみる。」

と言つて士を指名する。

士は立ち上^レがると悠々と黒板の前まで歩いて行きカツカツカツと音をさせ黒板に答えを書いていく。

優雅に書いているのが見ていてムカつくが答えは合つているようなので文句は言えない。

ため息交じりに頬づえをつき、ふと外を見る。

「つあれば！」

とつさに立ちあがつていた。

士も異変に気付いたのかすぐに窓へ駆け寄りグラウンドへ視線を落とす。

グラウンドでは信じられない光景が広がっていた。

先程まで体育でもしていたのだろう、走り高跳びのセットがグラウンドに出てている。

その走り高跳びのセットが無残に壊され、授業を受けていた生徒達

は何処からともなく現れた得体のしれない怪物達に襲われている。そう、おととい、そして昨日も現れていたあの、トカゲ男たちだ。

それが学校に、それも堂々と現れたのだ。

奴らはグラウンドの生徒達を追いまわし、押し倒し、踏みつけたり噛みついたりしている。

そして今までと決定的に違うのはその規模だ。

「何て数だ。」

グラウンドを埋めつくさんばかりに現れたトカゲ怪人たちは学校が目的とでも言ひように圧倒的兵力で迫ってきている。

「いぐぞ。」

「ああ。」

士と俺はそう言ひとすぐさま教室を出た。

「変身！」

「カメン、ライド　　ディケイド！」

士が変身する。

向かってくるトカゲ男達の一団へと突進しパンチ、キックの連打で敵を吹き飛ばす。

「アタック、ライド　　スラッシュ！」

士の斬撃。回転しつつ全方位へと斬りつける。

食らったうちの何体かはたまらず爆発と共に消滅する。

しかしいかんせん数が多くすぎる。いくら倒しても一向に数が減らない。

これはさすがにヤバいんじゃないか？数の力とは恐ろしいものだ。俺の数学の点数が一向に上がる気配を見せないのも…って話が違うか。

その時後ろから声がした。

「なん…なの…こいつら…。」

この声は、間違いない、ハルヒだ。

ハルヒの奴が俺達の後を追い、外に出てきていたのだ。

振りかえるとそこには案の定ハルヒが居て、

「くそつ。」

奴らが周りを囲んでやがる。

ハルヒは普段は絶対に見せない、いや、今までそんな顔したことないんじゃないかと思う程の恐怖にひきつった顔をしている。
なんというか、こいつにこういつ顔をされると無性に守ってやりた
くなる。

今のは忘れよう。

「いや…。」

かすれた声でハルヒが何か言つてくる。

俺は思わず走り出す。

「ハルヒ！」

ハルヒを囲むトカゲ男の内一体に飛びかかる。

が、やはり生身の人間の俺に歯が立つわけもなくいともたやすく振
り払われ、

その勢いのままボディブローを入れられ、悶絶したところを尻尾で
吹き飛ばされる。

俺はグラウンドの砂上を無様に「ゴロゴロと転がり、数メートル転が
つたところでやっと止まる。

正直言つて腹は痛むし呼吸もし辛いが俺はすぐさま何とか身を起こ
し立ち上がろうともがく。

ハルヒの居る方へと視線を向ける。

俺を吹っ飛ばしたトカゲ男が俺にトドメを刺そうと近づいてくる。
くつ、もう駄目か。

「アタック、ライド ブラスト！」

すぐ目の前まで迫ったトカゲ男が火花を散らしながら大きく後退。
どうやら土が助けてくれたらしかつた。

普段は偉そだがライダーとしての使命感みたいなものはちゃんと
あるんだな。

その他のトカゲ男達にも土の銃弾が命中。

そいつらは大きく怯む。

「おい、キヨン、立てるか？ 涼宮ハルヒを連れて、中に入つてろ。」

士はそう言い怯んだ怪人たちに更に銃撃の雨を降らせる。

「わかつたよ。」

俺は何とかそれだけ言つと無理矢理立ち上がりハルヒの手を取る。こりやどこか折れてるな、肋骨的なものが。

「ハルヒ、こっちだ。」

ハルヒは一瞬ホツとした表情を浮かべ、すぐに真剣な表情になると俺に引かれるまま駆けだす。

とりあえずどこの教室に逃げ込もう。そう考え駆けだす。

そして足の向くままでりついた教室。

元文芸部室、現SOS団の部室へと俺達は着いた。

「ハア、ハア、ここまで来れば。」

隣でハルヒも膝に手をつき肩で息をしている。息を整えハルヒに怪我は無いかと聞く。

ハルヒは首を振ると部室のドアへと手を掛ける。

そして中へと入る。

俺も続いて中へ、入れなかつた。

ハルヒが入つて一步も行かない内に固まつてしまつたのだ。

「おい、どうした、ハル…ヒ。」

戦慄した。

部室には先客がいたのだ。

もちろん団員ではない。

トカゲ男だ。

いや、微妙に違う。そもそも体色が紅だし、体も一回り大きい。

その怪人は俺達を見るとニヤリと笑つた（様な気がした）。

そしてその口からこの世のものは思えないよつな低い声を出す。

「貴様が涼宮ハルヒか。」

ハルヒは答えない。否、答えられないのだ。

怪人の放つ殺氣のせいでハルヒはガタガタと震えている。

それはもちろん俺も同じだ。

俺はハルヒを守ってやるどころか、一人で逃げ出すことすらできな
いらしい。

「貴様には面白い能力があるそつだな。」

おい、コイツ、いきなり何言い出すんだ？

「お前には、願望を実現させる能力があるんだう。」

コイツ、なんでハルヒの力のことを。

怪人は一步近づく。

「その力、この私のために使つ気はないか？どうだ、ん？」

そう言いハルヒに手を伸ばす。

ヤメロ、ハルヒに手を出すな。

「くそ、さすがに数が多いな。倒しても倒しても数が減りやしねえ。」

士はまだ戦っていた。

とはいえる動きは最初ほどの切れはない、疲労が蓄積しているよ
うだった。

それでも攻撃の手を休めず前方の2匹に上段回し蹴りを食らわせる。
食らった2匹は地に倒れ伏す。

と、ここで後方に居た3匹が跳躍すると士めがけ飛びかかる。

士は蹴り終えたばかりで態勢が整っていない。

「しまつ…。」

バンバンバン。

火花を散らせながら3匹のトカゲ男が無様に地面に倒れる。

もちろん士への攻撃は失敗だ。

士は驚いて銃弾が飛んできたであろう方向へ振りかえる。

「お前。」

そこには海東大樹が居た。

「やあ、士。」

「何しにきやがつた。お宝はいいのか?」

「この世界のお宝は涼宮ハルヒそのものだ。

お宝が入じや、僕にはどうしようもない。今回は諦めたよ。」

「じゃあどうこう風の吹きまわしだ? お宝も無いのに俺を助けるなんて。」

「勘違いしないでくれたまえ。僕はお宝が手に入らなくてムシャクシャしているだけや。」

「カメン、ライド　　『ダイシッエンド!-!』

海東がディエンドに変身。士の方へと跳躍。

「士、ここは僕に任せて行きたまえ。」

銃撃しつつ海東は言いつ。

「ああ、わかつた。」

士はそれだけ言いつと田の前のトカゲ男を蹴り飛ばし駆けだす。目指すはSOSの団の部室だ。

「あたしが、世界を思い通りにできる?...」

ハルヒは激しく動搖しているようだった。怪人が続ける。

「そうだ。お前が望めば、どんなことでも起こせるのだ。その力、ぜひ私のために使ってもらいたい。」

「何? それ?。」

こいつ、なんでハルヒの力のことを。とにかくアイツに何か言つてやらないと。

「ハルヒ。そんな奴の言つことなんか聞くんぢゃねえ。」

「ツ... そうよ。あんたの言つことなんて聞かないわ。」

たとえそれが本当だとしても、あたしはあんたのいいなりになんか

ならない！」

「そうか、ならば、死ね。」

怪人が爪を振り上げる。ハルヒが危ない。

俺はとっさに駆けだしていった。今思えば、なんでこんなことしたかな。まさかハルヒをかばつて自分が斬られるなんて。なんつー間抜けだよ、俺。

ザシユツ

「…キヨン？…キヨン。ねえキヨン。田を覚ましなさいよキヨン。
嫌…嫌…………！」

「フハハハ。バカな奴だ。さあ、涼宮ハルヒ、これが最後だ。私のために力を使え。」

「…さない…」

「ん？ 何か言つたか？」

「許さない。よくもキヨンを！

あんたさつきあたしには世界を望み通りにできる力があるって言つたわよね。」

「やつと使う気になつたか。」

「ええ。望み通り使つてやるわ。」

窓の外が暗闇になる。突風が起こり外の全てを飲み込み始める。

「こんな世界、破壊して

「よせ！」

教室のドアを蹴破り、勢いよく登場したのは仮面ライダー・ディケイド、士だ。

「お前が変えなくても、俺が変えてやる。

そいつがこうなつたのも、半分は俺の責任だしな。」

「カメン、ライド リュウキ！」

士は新たなライダーへと変身。そしてその手には一枚のカード。

「アタック、ライド タイムベント」

「あたしが、世界を思い通りにできる?...」

ハルヒは激しく動搖しているようだった。怪人が続ける。
「そうだ。お前が望めば、どんなことでも起こせるのだ。
その力、ぜひ私のために使ってもらいたい。」

「何…それ…」

こいつ、なんでハルヒの力のことを。とにかくアイツに何か言つて
やらないと。

「ハルヒ。そんな奴の言つことなんか聞くんじゃねえ。」

「ツ…。そうよ。あんたの言つことなんて聞かないわ。

たとえそれが本当だとしても、あたしはあんたのいいなりになんか
ならない!」

「そうか、ならば、死ね。」

怪人が爪を振り上げる。ハルヒが危ない。
しかしここで妙なことが起こった。

ハルヒと怪人の間の空間が歪んだのだ。次元の裂け目というやつだ。
そして、次の瞬間みたこともない仮面ライダーが怪人の爪を手に持
つた刀で受け止めていた。

「な、なんだ!?」

怪人は動搖する。

ライダーは怪人の爪を弾くと返す刀で一閃。
食らった怪人は後方へとよろめく。

「よう。危なかつたな。」

そのライダーは俺に向かつて気安く話しかけてくる。
この聞き覚えのあるムカつく声は、

「お前、土か!？」

「おう。そうだ。」

「なんでこんなところに。」

「色々あつてな。つと、その話は後だ。今はこいつを倒す。」

そう言うと士は怪人めがけ突貫。手に持つ剣で怪人を斬りつける。しかし、怪人も態勢を立て直したのか、数発食らった後は爪でしつかりガードしている。

さすがは親玉といったところか。

士の剣撃が受けられ始めて数発。敵が士の刀を捕まえる。

弾いてからの爪による一閃。士はたまらずよろめく。

怪人はすかさず追撃の爪攻撃。

全てまともに食らい最後の尻尾攻撃で吹き飛ばされる。

衝撃で変身が解け、いつものディケイドへと戻る。

俺はハルヒを守るようにそばへと来てそれを見ていた。

くそ、コイツ、強い。

士が何とか立ち上がる。しかし、疲労とダメージでフラフラだ。

怪人は最初の余裕を取り戻し悠々と間合いを詰めてくる。

バキッ！

怪人の後頭部に机が命中した。

何事かと思い視線を移す。

理由はすぐに分かった。

長門だ。

長門が力を使い机を飛ばしたのだ。

「き、貴様。」

怪人が長門に対し逆上し襲いかかる。

長門はヒラリと身をかわし士の横に着地。

両手を広げると後方の壁のなから、無数のつくえやら椅子やらが飛び出て来て怪人を襲う。

心なしか楽しそうに見える。まあ一昨日は歯が立たなくて鬱憤もたまってただろうしな。

怪人はそれを何とか爪でたたき落としながら身を守っている。

ん？ちよつと待てよ。長門の力って怪人に対しては使えないんじゃ

。「怪人本体に直接使用するのは不可能。でもそれ以外に使用し怪人にぶつけるなら可能。」

長門の俺の心の声を聞いたかのような適切な説明。恐縮です。

「なるほどな。こいつもただの人間じゃないってわけか。」

士は一人納得したようにうなずくと跳躍し飛んでいく机の一つに飛び乗る。手には一枚のカードを持つて。

「アタック、ライド　　スラッシュ！」

すれ違いざまに一閃。

怪人はその一撃をくらいい完全に態勢が崩れたのか残りの机やいすの嵐をまともに食らう。

ぶつかった机や椅子が全て粉々に碎けるまでそれは続いた。

後半は正直やりすぎだろと思わんこともなかつた。

しかしそここまでされても怪人はおなじみの爆発とともに消滅したりはせず。

「き、貴様ら。許さん、許さんぞ。」

そう言うと敵は逆上して襲つてくる、と思つたが不意に現れた空間の歪みへと姿を消した。

やれやれ、言つてることとやってることが違つぞ。お前はどうぞそのフリーダムか。

まあアイツの場合止めろと言いながらバンバン撃つてたわけだから微妙に違うが。

「閉鎖空間に入った。」

長門が淡々と言い切る。これ以上怪人を痛めつけられずにちよつと残念、といった感情が声音に含まれていたと思つたのは俺の気のせいではないだろ？

「なるほど、で、どうやつたらその閉鎖空間でのに行けるんだ？」

「任せて。」

長門が何やら呪文の様なものを唱え始める。

すると怪人が発生させたものと似た空間の歪みが現れた。

「入つて。」

長門に促され士は迷いなくその中へと飛び込んだ。

「ここまで来れば追つてはこれまい。」

「それはどうかな。」

「な、貴様。何故。」

「悪いが、逃がすつもりはないぜ。」

士は言いながら怪人めがけ突進。

斬撃をたたきこむ。

が、しかし、やはりこれも受け止められた。
受け止めたのと反対の爪で振りおろし攻撃。
士は後方へ大きくよろめく。

「ちつ。」

「フハハハ。貴様一人なら、私の相手ではない。」

「ならば二人ならどうです？」

怪人の後ろから声。この声は。

「古泉、とか言つたか？」

「おや、覚えていてくれたようですね。そうです。古泉一樹です。
ようやく出番のようですね。」

そう言う古泉の手にはオレンジ色の波動のようなものが。
それを怪人めがけ打ち出す。

怪人はこれを爪で弾くと古泉めがけて切りこむ。

しかしこれを空中に浮遊してかわすと浮いたまま波動を打ち出す。

これには怪人も防戦一方になつてゐる。

「俺も忘れてもらつちゃ困るな。」

士が背後から怪人の背中を切りつける。正直言つて卑怯だ。

態勢を崩した怪人は古泉の打ち出す波動までも受け大きく吹き飛ばされる。

「くう！」

怪人はまたも空間に歪みを作ると外へと脱出した。

「外へ出ましたか。」

「俺も出してくれ。」

「わかりました。」

ひと足早く現れた怪人はハルヒの方へと走つてくる。

「おい、頼む。世界を変える。今すぐ変えるんだ。奴の居ない世界に、今すぐ。」

怪人はさつきまでの命令口調ではなく頼むようにハルヒに言い、手を伸ばす。ハルヒと俺の居る場所まで後数メートルと迫ったその時。

バーン！

銃声。

怪人は火花と共に轟ける。

そこにはディケイド、土が居た。

怪人はそれを見ると急に喋り始める。説得を試みるようだ。こいつの傍若無人な性格からして何を言つても聞きやしないとは思うがね。

「何故、何故我々の邪魔をする。

お前たち人間にも、世界を変えたいと思つことがあるはずだ。」

しかし士は冷静に返す。

「確かに、人間もそう思うことがあるさ。それもしょちゅうな。だがな、思い通りにならないからこそ楽しいんだ。

思い通りにならないからこそ、人は努力するんだろうが。

ここがお前と、俺達人間の違いだ！一緒にするな。」

「き、貴様、何者だ。」

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ。」

「グオオオオオオオオオオオオ！許さん。許さんぞ！」

怪人は最後の攻撃に向け雄叫びを上げ士気を高めている。

士の必殺技が決まり見事怪人を倒しハッピーエンド、といわけには

いかず、

後ろからの突然の声。

「キヨン。あんたも変身しなさい。」

「は？」

何を言つているんだこいつは。恐怖のあまり壊れたか。

「だから、あんたも変身してこいつを倒すの。できるわよ。あたしには、願望を実現する能力があるんだから。」

さつきまで怯えきてガタガタ震えていたとは思えないくらいに元気いっぽいの声音で俺にそう言つてくる。

自分の能力まで知つて向かうところ敵なしだな。

そんなハルヒにそこまで言われちや断れないわけで、といふか正直俺も変身してみたいって願望は少しくらいあつたさ。いや訂正、大いにあつた。

といふわけで、いつぞやのテレビで見た仮面ライダーの変身ポーズをうひ覚えで再現してみる。

「へーん 身！」

するとどうだ。俺の体は黒と茶色のスーツに包まれ腰には日本刀らしきものが吊り下げられているではないか。

色が地味とか、武器が何故日本刀なんだとかの突っ込みは受け付けません。

兎にも角にも俺の変身は成功したようだ。

と、機嫌の悪そうなハルヒの声。

「やり直し。」

「へ？

「やり直しよ。変身がダサすぎるわ。そんな昭和の変身じや全然納得いかないわ。もう一回よ。」

アホか。どこの世界に変身したらダメだしされて、やり直す仮面ライダーが居るんだ。絶対やらねえぞ。断じて。

ここでやり直したら俺は俺でなくなる。

そこで怪人が怒りに震えた声を俺に向けて放つ。

「貴ツ様アアアアー！この私をコケにしやがつてえええ！」

いやほんとゴメン。でも一番コケにしてるのは俺ではなくアイツだと思うぞ。怒るならアイツに怒つてくれ。

さつきまで心配してた俺がバカみたいじゃないか。

そんな俺の願いとは裏腹に怪人は逆上して襲いかかってくる。これ、やばくないか？

「キヨン・ミサイルよ。」

ミサイル？ミサイルだと？んなもん一体どこにあるんだよ。そもそも何故ライダーがそんなものを使う。

そう思いながらふと見ると俺の右手にはミサイルが。マジかよ。

それを怪人めがけ投げつける。

突然のこと怪人は全く対応できずに爆風の餌食となる。

当然だ。俺だつて未だにわけがわからん。なんでミサイルだ。アホか。

怪人はしかしそまだ生きていた。

「全く、しぶとい奴だな。」

「同意。」

俺の意見に長門が同意してくれる。

「斬り込んで。サポートは私がする。」

長門に言われ俺は迷わず突進する。

当然だらう。長門のサポートなら100%頼れると断言できる。

突撃する俺の脇を机やら椅子やらがビュンビュンと飛んでいき怪人にぶち当たる。

怯んだところへ俺の会心の突き。悪・即・斬つてなわけでは断じてない。

命中。しかし怪人は少しよろめいただけで倒れない。

そこへ士が割り込みよろけた怪人にパンチ、キックの嵐。

最後に後ろ回し蹴りをお見舞いすると怪人はたまらず吹き飛んだ。

「トドメはお前にやるよ。」

士がカードをバックルに挿入。

「ファイナル、アタック、ライド キヨキヨキヨキヨン！」

ん？今俺の名前言わなかつたか？といつか俺の名前はキヨンじやないぞ。それは俺のあだ名だ。

と、俺が突っ込んでいると俺の目の前にティケイドの必殺技の時のようなカード群が現れ始める。

「お、おい。どうすりゃいいんだよ。いきなり必殺技とか言われてもだな、俺にも心の準備が。」

「なんでもいい。蹴るなり、斬るなり、好きにしろ。」

んな投げやりな。そういうヒーローってどうこうふうに必殺技とか考えてるんだ？

「飛んで。」

後ろから長門の声。俺は言われるままにジャンプした。すると俺の足元に一つの机が、足場となり怪人めがけ突き進む。物凄い速さでカード群の中をくぐりぬけていく。

ええい、こうなつたらもう、やけくそだ。

俺は手に持った刀を思いっきり振りぬいてやつた。

その一撃がちょうど怪人の胴を薙ぎ、受けた怪人は断末魔の悲鳴を上げ爆発と共に消滅。

俺は変身が解けた。

「すごいじゃない、キヨン。」

そう言い駆け寄つてくるハルヒ。

俺が覚えているのはここまでだった。

～ヒローグ そして日常～

数日後、俺は自宅のベッドで目覚めた。

倒れた原因はインフルエンザ、だそうだ。

ただ正直言つて妹の看病と称した嫌がらせには本気で泣きそうになつた。本人に悪気はないのだろうが。

母が熱が下がつても一、三日安静にしていなさいと言つのうで学校は休むことにした。

そして明日から学校へも行くことにした日の夕方、予想外の客が俺の家に来た。

「な、長門？ なんでうちに？」

「お見舞い。」

それだけ言つと長門は靴を脱いで上がる。まだ何も言つてないんだが。というかもうお見舞いなんて必要ないくらい元気なんだがな。

長門は脱いだ靴を揃えてから俺の方へ向くと、

「あのあとどうなつたのか、気にならない？」

と言つてきやがつた。なるほど、それを俺に教えるためにわざわざ御苦労様です。

長門の話によると俺が倒れてまたモヤハルヒが暴走し、世界は改変されそうになつた。

それを土が何かの力を使い、この世界に怪人が現れる前、具体的にはあの月曜日へと時間を戻したんだそうだ。俺、参上つてわけだ。

あとは長門の情報操作で怪人が現れないようにし、一件落着、だそうだ。

じゃあ何故最初から怪人が現れないようにしなかつたかと言つと、長門曰く

「あの時は怪人のデータが全く無かつたから手の施しようがなかつた。

でも一度体験したのなら話は別。怪人のデータも分析し終えていたから問題なくできた。」

だそうだ。

ちなみに何故時間を戻したのに俺には記憶があるかと言うと、これも長門曰く、

「門矢士に頼まれた。」

だそうだ。アイツもアイツで一体何がしたかったのかね。

しかしハルヒが仮面ライダーを見たというのは結局変わらず、俺達は明後日の土曜日、めでたく怪人探しをするのであった。当然何も見つからなかつたが。

～ヒューローク2 神曲の世界～

「やつと帰ったか。遅いぞ、なつみかん。一体今まで何処で何をやつてたんだ。」

「それがですね、光陽園学院といつとこいらまでコウスケと来たのは覚えてるんですが、

そこから先の記憶が曖昧ですね。」

「なるほどな。恐らく情報統合思念体とやらの仕業みたいだな。とにかく何も無くて何よりだ。次の世界へ行くぞ。」

「え？ 士君、もうこの世界でのやるべきことは終えたんですか？」

それに情報何とか体つて一体…。」

「そんなことはどうでもいい。わざと次へ行くぞ。」

士にせかされたなつみは渋々と言つた感じで次の世界へ行くための毎度おなじみの動作を始める。

そして降りて来たのが、

『神曲 DANTE'S INFERNO』

と書かれたスクリーンだ。周りにはこの世の物とは思えないおぞましい絵と大きな鎌状の影が描き込んである。

「ここは…。」

「神曲？」

「あ、私知っています。神曲っていうのは昔の有名な詩人、ダンテっていう人が書いた物語みたいなものですよ。」

「ついに俺達は物語の世界にも来ちまつたっていうことか。」

俺達の冒険はまだまだ続くようだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0070m/>

仮面ライダーディケイド～涼宮ハルヒの世界～

2011年3月26日15時08分発行